

高齢者の眼の病気（3）

さて、今回からしばらく加齢黄斑変性という病気についてお話します。

この病気はこれまで日本ではあまり聞かない病気でしたが、最近たいへん患者さんの数が増えています。

米国、ヨーロッパ、オーストラリアの3大陸では、加齢黄斑変性は成人の失明原因の第一位となっています。

ではどのような病気なのでしょうか。

まず網膜の中心がいたみますが、初期は無症状のことも多いです。職場の健康診断の眼底写真で『加齢黄斑変性の疑いあり』と言われて眼科を受診されることも多いです。症状としては『ものがゆがんでみえる』『視野の中心が暗い』が代表的なものです。

ご自分で片方の目を隠されて、まっすぐな線や碁盤の目を見てみてください。線がゆがんで見えたり、暗い影で見えない箇所がでていたら要注意です。すぐに眼科専門医を受診してください。

初期はドルーゼンといってちょうど肌のしみのような変化が網膜の中心部にできます。（ただしこのようなしみのような変化がでないかたもいます）このドルーゼンができた時点ですでに加齢黄斑変性がはじまっています。このしみのような沈着物は網膜組織をさらに傷めます。その結果、脈絡膜新生血管という病的な血管が網膜の奥から発生してきます。こうなると突然出血を起こして、急に視力が下がることがあります。病的な血管が発生した時点でもものがゆがむ、という症状が出てきますので要注意です。自覚症状がでた時点で病気がかなり進行していると考えてよいでしょう。

このほか日本人には、大きな意味で加齢黄斑変性に含まれるのですが、『ポリープ状脈絡膜血管症』という疾患が非常に多いことがわかってます。これは白人には頻度が少なく、わたしたちも東洋人に多い病気です。おそらく発症には遺伝的素因が深く関与しているでしょう。網膜の奥の脈絡膜という部分の血管が大きく腫れ上がり、こぶのような形をします。眼科で特殊な造影剤を使った写真撮影をすると明瞭に病巣が浮かび上がります。ここから時に大出血を起こし視力を失うこととなります。血圧の高いかたは注意が必要です。

このように、加齢黄斑変性とは馴染みが薄い病気でありながら、実はたいへん頻度の高い病気です。今後日本においてますます患者さんが増えてくるでしょう。

現在日本は高齢者が人口の多くを占める高齢化社会に突入しております。日本がますます生産性の高さを維持するためには高齢者に方に十分に社会貢献をしていただく必要があります。そのためには高齢者のかかる眼の病気を熟知し、できるだけ病気にならないよう最大限の配慮をしたいものです。